TNC 通信

２０１４
６月号

８日に「第19回定期総会」を開催へ

富谷日中の「第１９回定期総会」が８日、開催されます。特に今回は２年後に予定されている市制移行を見すえての総会となる重要な行事となります。既に幹事会では役員を理事制としていくことになり、規約改定も了承され、通常の事業報告・決算や事業計画・予算案の審議とともに規約及び２年任期の役員改選も検討していただくことになっております。

〈日時〉６月８日（日）１４時から。終了後に懇親会。〈会場〉富谷町内の町上会館。※懇親会会費は５００円。〈会費納入〉当日は年会費の受け付けを行います。会員皆様のご出席を、よろしくお願いいたします。

植林写真展を楽しみに！

４月に行われた「吉林省緑化事業」の「写真展」が開催されます。今回の訪中には多くの新しい方が参加し、写真も楽しみです。富谷日中からは本郷・水戸氏の２会員の写真が展示されます。ぜひご鑑賞下さい。

◎７月１５日（火）から２１日（月）まで。◎定禅寺通り・エルパーク仙台の展示ギャラリー。

≪話題≫中国語コンテストの応援で新潟へ…菊地紅子

５月１７日に新潟総領事館主催の「第１３回大学生中国語スピーチコンテスト」があり、教育部の潘領事の招待を受け、１３年度中国語スピーチ大会で６位入賞した泉区・吉澤千明さんと共に参加しました。吉澤さんは大学生ではなく特別参加。３人の子の母でＮＨＫラジオ講座で勉強、と知って場内から“すごい”との声が上がり、特別賞に。何平総領事も「もし学生なら、あなたが一番ですよ」と激励。私は初めての新潟で、一緒にバスで行きました。疲れましたが、大変、有意義な一日でした。

（左から潘、菊地、何、吉澤さん）

仙台の“魯迅”を歩く③

概略③『藤野先生』　１９２８年、北京で発刊された『朝花夕拾』（ちょうかせきしゅう）に収められている。執筆は２６年１０月に厦門（あもい）で発表された。医学からの転向、恩師との出会いと別れが感動的。中国の教科書でも掲載された。

さて周樹人の２軒目の下宿は、現在の土樋１丁目４－１７で鹿子清水通り（**写真㊨**）を下った土樋通りとの角である。閑静な住宅地でマンションも多い。地名由来の井戸は既に無いが、歩いて１０分ほど更に下ると「米ヶ袋縛り地蔵」にぶつかり裏手の広瀬川（**写真㊧**）に出る。当時は川沿いを散策できたかどうか。またすぐ近くに『三太郎の日記』で著名な阿部次郎（1883～1959）記念館もある。二人の出会いはないが、ほぼ同時代を生きている。余談だが立町の割烹・てんぷら「三太郎」に「日記の間」があり、その名を留めている。ああ、お手頃なランチでも行きたいものだ。

下宿は宮川信哉氏の経営であるが、ここは大泉幸四郎邸の広い庭のはずれの２階建て離れであった。『藤野先生』は小説であるので、脚色もあるし、記憶違いも当然考えられるが、当時、故郷の友人に送った手紙が残っている。それには「この地はなかなか寒いのですが、昼間はいくらか暖かです。風景は好いのですが、下宿はまったく劣悪です。東桜館（東京での宿舎）のようなところを求めようとしても、絶対にできません。いま、土樋町に引っ越そうと思っていますが、そこも、いいと言うわけではなく、ただ学校に近く、いくらかあたふたせずに済むというだけのことです」（通称「仙台魯迅書簡」１９０４年４月１８日）とある。しかし、今歩いても距離的には少し近いという程度で、大差はない。おそらく正門ではなく桜小路（現在は東北大構内の南門から北門）を通って、医専の裏門までの約８００㍍を通ったと見るべきだろう。その方が校舎に近い。

食事は佐藤屋の方が、魚が多くても弁当屋だけに良かったようだ。周樹人は宮川宅で「毎日毎日喉に引っ掛かるサトイモの茎のみそ汁を飲まねばならなかった」（「藤野先生」）と。学友は“仙台ではよくでるもので（芋梗・ずいき）おいしかった”と指摘。当時はそうした食事は当たり前であったようだ。明治３７年から３８年にかけては、東北は低温であり大凶作だったという。